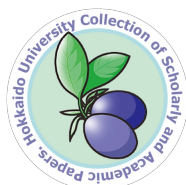




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	断酒会にたどりついたあなたへ (6)
Author(s)	眞崎, 睦子
Citation	かがり火, 166, 19-19
Issue Date	2011-11-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62158
Type	article
File Information	kagaribi-6.pdf



最終回、この連載にたどりつくまでにご縁のあったお顔が浮かびます。

息子さんを酒害で亡くされてからも、十年以上、自助グループに通われていたお母様、「息子はまだそこま

でひどい依存症ではない」が口癖のお父様、黒々とした痣(あざ)が痛々しかった女性、アルコール問題のシンポジウムに行く途中、道をおたずねしたら「行き先が同じ」とご案内くださり、それ以来、やりとりをするようになった東京のSさん、開放病棟で献立表

を見せてくださった看護師のOさん。全断連事務局で

断酒 エッセイ



美味しいどら焼きを教えてくださいましたNさん、短くも深い情報をくださったOさんとHさんにもお世話になりました。

この連載でもお名前を出させていだいた札幌連合断酒会の表さん、工藤さんご夫妻、Nさんご夫妻、そして札幌のアメシストをけん引していらつしやる西川さん。イベントの日には、何度も資料を確認しながら会場まで案内してくださったHさんとYさん。札幌のみなさまとは、率直な意見交換等を経たからこそ、一定の信頼関係を築くことができた

れません。今年も私の講義室にお運びくださり、断酒会にたどりつくまでをお話しくださいました。毎年恒例となった、緊張の日です。私の感謝を書き連ねるよりも、学生の感想を一つ紹介しましょう。

「……今後、日本全体で(アルコール依存症に対する)意識が変わり、気軽に相談したり、早い段階で治療ができるようになればいいと思う。今日、僕の意識が変わったのだから、日本全体の意識だつて変えられるは

断酒会にたどりついたあなたへ(6)

北海道大学大学院 眞崎 睦子

ずである」(五月一七日、家族会の方をお迎えした授業後)。

この連載の執筆者として、私の名前をあげてくださったのは、北海道北見市のMさんです。2009年の夏、「北見・オホーツク紋別・遠軽断酒会合同勉強会」に私を呼んでくださったというご縁です。私にとって、生まれて初めての、広大な北海道を実感する移動。早朝のハッカ記念館の香りや、どこまでも続くまっすぐな道は、あたたかく迎えてくださったみなさんのお姿とともに、忘れられない思い出です。

残念ながら、ここにあげたみなさ

まの存在や活動は、社会の中心から遠く離れたところにあります。

酒害を訴える団体関係者のみなさまからの「読みましたよ」といううれしいご連絡に、改めて「かがり火」の読者の幅広さを実感したこともありました。このような団体がお互いの動向を見守り応援しながら、それぞれの活動をすすめていらつしやること、さらに、このような協同の輪が大きく広がっていることも、この手に感じ取ることができました。

未曾有の大災害が起こったのも、この原稿執筆中のことでした。それでも7月には東北断酒学校が守られました。そして兵庫県の断酒会員の

方が、アルコール専門医療関係者と共に、阪神大震災のご経験から「震災と飲酒」について警鐘を鳴らされました(神戸新聞、他)。阪神大震災後、助かった命を孤独と酒で締められた方、失われた方がなくなかったことは、今一度、声を大にして伝えなければなりません。

今、断酒会は少しずつ変わろうとしています。その動きを遠巻きに眺め、認める人々も確実に増えています。

す。同時に、変わることなく灯る「かがり火」をめざして断酒会にたどりつく人もいます。そのことを思いながら、私も、同時代を生きる小さな一人として、広い意味での酒害者とは誰か、酒害者と家族による自助グループとは何か、どうあるべきかなどを、みなさまと共に考え、伝え続けていきます。

連載中、断酒会に連なる全国各地の方々からお便り等、励ましの声をお届けいただきました。一月号以来、一年に渡ってお付き合いくださり、本当にありがとうございました。

私は、断酒会に関われば関わるほど、アルコール依存症に対する自身の偏見に気が付いたり、「これで偏見の解消を目指しているとは」などと疑問を感じたり、感謝と学び、時には、失望と落胆をも繰り返している、ごく普通のあなたの隣人です。いつの日か、お目にかかることを、あるいは再会の日を楽しみにいたしております。

連鎖握手のその瞬間にあなたの隣にある手のひら、そして隣の誰かに差し出されるあなた自身の手のひら―それこそが、断酒会にたどりついたお一人おひとりの「あなた」から一度はこぼれ落ちた希望や自信を拾い上げる断酒会の手のひらであることを祈りながら。

(完)